統語と辞書とのインターフェイス

—英語の他動性交替現象と日本語の複雑述語形成との比較研究—

山田　義裕

1　はじめに

本稿では統語と辞書とのインターフェイスにおける日英語の比較研究についての意義を、語彙意味論研究の最近の動向を紹介しながら考察する。語彙意味論研究における理論上の中心課題として、語彙構造と統語構造との関係に関する (1) の二つの問題がある。

(1)　語彙構造と統語構造の関係についての中心的問題

a. 述語主要部の意味特性がどのような形式で辞書に記載されるかという問題

b. 述語主要部の意味特性がどのような形で統語表示に反映されるかという問題

(1a) は辞書とはどういうシステムと考えるべきかという、辞書と統語についての根本的な問いと直結する問題である。例えば、述語主要部の項構造は単なる意味役割のリストかそれとも内部構造をもつのかとか、語の多義性を生み出す辞書特有の語彙プロセスが存在するかどうか等々が (1a) の具体的問題となる。

(1b) は一般に「リンキング問題」とよばれている。リンキングとは、述語のとる項の意味役割のタイプとその項の現れる統語位置との関係についての一般化である。 リンキングに関する一般的仮説に、Baker(1988) が提案する意味役割付与の統一性仮説（The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis）がある。[*1] これは、語の項の意味役割タイプとその項の基底の統語位置との関係は常に一定でなくてはならないという趣旨の仮説である。この仮説が基本的に正しいとする

[*1] The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis
Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure. (Baker 1988: 46)

と、リンキングに関係する意味役割タイプの特定と、それらが統語に写像される際の構造上の位置を明らかにすることが、その次の具体的研究テーマとなる。

語彙意味論の分野では、辞書と統語のインターフェイスに関する (1) の理論上の問題を念頭に置きながら、他動性交替（transitivity alternation）を始めとする交替現象や動詞の類型について、これまで多くの経験的研究が行なわれてきている。[*2] 本稿では、その中から英語の代表的な他動性交替の現象である、起動使役交替 (2a,b) と中間態構文の交替 (3a,b) の二つに焦点を当て、辞書と統語の関係について考察する。

(2) 起動使役交替

a. Tomatoes grow.

b. They grow tomatoes.

c. トマトが育つ。

d. 彼らはトマトを育てる。

(3) 中間態構文

a. John cut the meat.

b. The meat cuts easily.

c. ジョンは肉を切った。

d. その肉は簡単に切れる。

これらの英語の交替現象に関するこれまでの統語論および語彙意味論分野の研究を概観した後、(2c,d) や (3c,d) の日本語の複雑述語（complex predicates）形成についての形態論及び統語論研究が、英語の交替現象の分析に新たな方向を示してくれることを論じたい。

次節以降は、次の手順を踏んで議論を進めていく。まず第 2 節では、文法全体の中で辞書部門がどのような役割を果たすべきと考えられてきたかを、標準理論モデル以降の生成文法の研究史を踏まえて概観した上で、交替現象を語彙規則という辞書内のプロセスで説明する試みを紹介し、その分析の問題点と解決法を経験的事実に照らして考える。第 3 節では、交替現象の統語的アプローチを紹介し、語彙論的アプローチと統語論的アプローチとの経験的な違いについて議論する。第 4 節では、語彙従属（lexical subordination）というメカニズムを利用した語彙的アプローチの修正案を、経験的及び理論的観点から検討する。第 5 節では、

[*2] Levin (1993) 及びそこで挙げられている参考文献を参照のこと。

抱合語（polysynthetic）や膠着語（agglutinative）における複雑述語形成という形態論的プロセスの多くが、語彙的なものではなく編入（incorporation）という統語操作（主要部移動）によるものであるという分析を紹介する。そして、英語の交替現象が、抱合語等における音形をもつ要素（overt elements）間の編入プロセスと平行した、動詞ルートとゼロ形態素の結合という統語プロセスであるという提案について、英語の交替現象と日本語の複雑述語形成を比較しながら、それを擁護する議論を行なう。

2　辞書の役割と語彙論的仮説

生成文法は、「精神/脳のモジュール性」を研究の前提とした上で、さらに人間の精神/ 脳には音のシステム（articulatory-perceptual system）と概念システム（conceptual-intentional system）という二つの運用システム（performance system）に埋め込まれた「言語（I-language)」という認知モジュールが独立に存在していると仮定し、その特性の解明を目指し研究を行なっている。生成文法は言語の性質・起源・使用（nature, origin, use）を研究していく上で、研究の初期の段階から「文法（grammar)」という「言語（I-language）についての理論」を明示的に打ちたて、研究の進展にともない理論にいくつか重要な変更と修正を加えてきた。

文法の基本的構成については、Chomsky（1965）の「標準理論（Standard Theory)」以降は一貫して、文法は辞書（lexicon）と統語（syntax）という二つの異なる性質をもつ部門からなると仮定されている。辞書とは、基本的には、その言語の語彙項目（lexical item）のリストで、この部門で各語彙項目の固有の特性が指定される。一方統語は、辞書内の語彙項目を元素（atom）として取り込み、それらを Merge と Move という操作により音と概念のシステムへの入力となる表示へと組み立てていく計算システムである。*3

辞書と統語の二部門を仮定する理論モデルにとって、「語（word)」というこの二部門にまたがる要素の扱いをどうするかは、当初から大きな問題であった。つまり、この理論モデルでは、語レベルの問題である屈折（inflection)、派生

*3 標準理論から 1980 年後半の「拡大標準理論 （Extended Standard Theory)」に至るまで、この二つの部門をつなぐインター フェイスとして D 構造（D-structure）という表示のレベルが仮定されていた。この D 構造を介して各語彙項目の構造上の特性（語彙構造）が階層的（configurational）な構造表示として計算システムである統語に投射（project） される。

(derivation)、複合（compounding）という語形成プロセスがどちらの部門で行なわれるかについては、アプリオリに決まる事項ではないのである。そのため、これまで形態論の分野における経験的研究を通じて、語形成プロセスや語の項構造（argument structure）レベルの多義性の問題が、辞書部門で扱われるべきものか、統語の問題なのかについていくつかの立場が表明され、現在でも議論が続いている。次節では、この問題を 1970 年代初めに提案された語彙論的仮説（lexicalist hypothesis）に焦点を当てて見ていく。

2.1 語彙論的仮説と語彙規則

標準理論より前の初期の生成文法では、(4) のような文と名詞句に現れる動詞 (refuse) とその派生名詞 (refusal) との分布上の特性の共通性を変形規則（transformation）により説明していた。[*4]

(4) 動詞と派生名詞の分布上の特性の共通性

a. John refused to go.

b. John's refusal to go

しかし、標準理論において語彙項目は素性の束であるという考えが導入され、次のような分析が理論上可能となった。つまり、動詞とその派生名詞の共通性を統語素性（syntactic features）を利用して述べるという方法である。(5) をみてみよう。

(5) 語彙論的仮説における動詞と派生名詞との関係についての仮定[*5]

a. 範疇素性が指定されてない REFUSE という語彙項目がある

b. REFUSE は厳密下位範疇化素性（不定詞を補部としてとる）や選択素性（動作主をとる）などの文脈素性をもつ

c. REFUSE の範疇は N, V の下への語彙挿入で決まる

d. 形態規則の適用で動詞の refuse と名詞の refusal に固有の形態が与えられる

動詞の refuse もその派生名詞の refusal も REFUSE という同一の範疇中立的要素から形態規則で形成されたと仮定することで、これらの分布上の特性の共通

[*4] Lees (1960) 等を参照のこと。また、交替現象のような同一の動詞が取る二つの構文間の関係も変形規則で説明されていた。

[*5] Chomsky (1970:21-22) を参照のこと。

性をとらえることができる。

Chomsky(1970) は、動名詞的名詞形（gerundive nominals）と派生名詞形（derived nomimals）の違いについてのいくつかの経験的議論に基き、動名詞的名詞化は統語の問題であるが、一方派生名詞化は語彙部門で扱うべき問題であると主張した。その後、Jackedoff (1972) 等の経験的研究や変形規則のパワーを抑えるという概念上の必要性（プラトンの問題の解決）に基づき、屈折形態論（inflectional morphology）は統語の問題であるが、派生形態論（derivational morphology）は全て辞書内部で扱うべき問題であるという語彙論的仮説の立場が明確になった。辞書を従来より豊かなシステムと考え、同時に統語規則の記述能力を抑えることで文法のシステム全体を制限的にするという考えが、その後の研究において主流となった。*6

語彙論的仮説を採用し、辞書部門が派生形態論を含むと仮定すると、 辞書は統語とは別の種類の計算を請け負うこととなる。つまり、辞書は単なる語彙項目のリストというのではなく、それに計算部門が加わった "computational lexicon" として特徴付けられる。語彙論的仮説のもとで辞書においてある種の計算が行なわれるという考えは、派生形態論だけでなく従来は変形規則で記述されることが多かった他動性交替を初めとする交替現象の説明にも応用されるようになっていった。具体的に言うと、辞書内に述語の項構造を変更する「語彙規則」を仮定することで交替現象を説明しようとする研究が生まれてきた。*7以下、このようなアプローチをとる初期の研究の代表例として Williams (1981) の議論を見ていく。

2.2 Williams (1981) の交替現象の分析

「語彙規則」は述語の語彙構造変更の可能なパターンについての一般化を意図したものである。述語の語彙構造の変化のパターンを示すことで、次の二つの課題の解決、すなわち派生形の項構造変化の可能性をシステマティックに説明すること、そして同一の述語の項構造レベルでの多義性を記述し、交替現象についての一般化を辞書のレベルでとらえることを目指す。Williams (1981) は、上で述べた二つ問題を語彙規則（ウィリアムズは形態規則とよぶ）により体系的に取り扱うことを試みた先駆的研究の一つである。まず、ウィリアムズは述語の項構造を

*6 この考えから、範疇中立的な句構造の概念である X-bar 理論が発展していく。

*7 チョムスキー自身は辞書に語彙規則のような統語とは別の規則体系があるとは言ってはいない。

次のように仮定している。[*8]

(6) ウィリアムズの項構造についての仮定（Williams 1981:83-84）

a. 述語の項構造とは、その述語が取る項（θ役割のタイプ）のリストである

b. 項のリストは外項という主語位置に投射される特殊な項を一つ含み得る（外項は下線で表記する）

(7) 項構造サンプル

a. hit: (<u>Agent</u>, Theme); John hit the ball.

b. seem: (Theme, Goal); It seems to me that ...

そして、語彙規則による項構造の変化のパターンを、外項が関わる次の二つの場合のみに制限することで、規則の一般性を高いレベルで保ちながら、派生表現の特性や交替現象に見られる他動性の変化などの経験的問題を説明しようとした。

(8) 語彙規則による項構造の変更パターン

a. Externalize an internal argument: E(X)

b. Intenalize an external argument: I(X)

(8a) と (8b) がどのような現象を説明するために仮定されたのかを、それぞれ一ずつ例をあげみていくことにする。(8a) の内項を外項化するプロセスは、動詞に *-able* を加え形容詞化する語彙規則の一部と仮定されている。具体的には (9) に見られる「*-able* 形容詞化」は Theme を外項化する規則 (10) として述べられている。[*9]

(9) a. Those things are promisable/perishable. (*Theme* externalized)

b. *Those people are runnable (*Actor* externalized)

c. *Those people are promisable (*Goal* externalized)

(10) -able 形容詞化の項構造変化

E(Th): read (<u>Agent</u>, Theme) → readable (Agent, <u>Theme</u>)

---

*8 述語の語彙構造の記述方法は研究者により微妙に異なるが、語彙構造/項構造で指定される情報は、少なくとも、述語のとる項の意味役割のタイプ、及び内項と外項の区別の二つを含むのが一般的である。

*9 Williams (1981:93) を参照のこと。

-able 形容詞化という形態プロセスは、項構造レベルにおける Theme 要素の外項化であると分析することで、(9a) と (9b,c) の容認可能性のコントラスト及び Theme 要素が統語上主語位置に現れることを両方を同時に説明できるとしている。

次に外項の内項化のパターン I(X) を見ていく。ウィリアムズは (11) の他動性の交替を「自動詞の他動詞化」の現象としてとらえ、これを (12) の Theme の内項化というプロセスと外項 (Agent) の導入というプロセスを仮定することで説明を試みている。[*10]

(11) 起動使役交替

a. The ice melted.

b. John melted the ice.

(12) Theme の内項化による他動詞（使役形）の形成（Williams 1981:99）

$\text{melt}_{Vi}(\underline{\text{Theme}}) \rightarrow \text{melt}_{Vt}(\underline{\text{Agent}}, \text{Theme})$

この交替現象の分析は直感的は次のように言えるであろう。起動使役交替では自動詞が基本形で他動詞が派生形である。自動詞（例えば melt）は Theme を外項としてとる一項動詞である。自動詞の派生形である他動詞は (12) の Theme の内項化及び動作主の導入という語彙規則で形成される。つまり、このアプローチでは、起動使役交替という他動性の交替は辞書レベルでの語彙的プロセスということになる。

ウィリアムズの研究以降、派生形態論や交替現象についての経験的研究において、項構造における外項ステイタスの変更を利用した分析がいくつか提出されている。例えば、Roberts (1986) は (13) のような中間態構文は外項の抑制（suppression）と Theme の外項化という二つの語彙プロセスが関わっていると主張している。

(13) 中間態構文

a. This book translates easily.

b. Those chickens kill easily.

[*10] 何故他動詞の自動詞化と考えないかは、次のより一 般的仮定による。
Since these rules (E(X) and I(X)) exhaust the possibilities, we predict that no rule of morphology can shorten argument structure.

c. Messages transmit rapidly by satellite. (Roberts 1986: 186)

ロバーツの中間態構文についての提案は次のとおりである。

(14) 中間態の分析（Roberts 1986:189）

a. 中間態は他動詞の項構造を変える効果をもつ辞書レベルの語彙プロセスが関わっている。

b. 他動詞の外項の Agent が統語的には不活性な chômeur theta-role に変わる。

c. 他動詞の内項の Theme が E(Theme) のプロセスで外項となる（$\Longrightarrow$ D 構造で主語位置に投射）。

(15) 中間態形成（Middle-formation）の項構造変化

kill: (<u>Agent</u>, Theme) → ({Agent}, <u>Theme</u>)

3 他動性の交替現象への統語的アプローチ

前節では起動使役交替と中間態構文という二つの他動性交替を、外項の内項化と内項の外項化という二つの語彙プロセスで説明するアプローチを紹介した。このような考え方に対し、他動性の交替現象は語彙プロセスではなく基本的に統語の問題であると主張する研究者たちがいる。彼らの基本的考え方を、起動使役交替現象の分析を例に紹介する。

起動使役交替の特徴は、自動詞構文の主語が他動詞構文では目的語として現れている点である。ウィリアムズは、自動詞構文の主語位置の項（Theme）のステイタスは外項であるが、他動詞では内項に変化し、Agent が新たな外項として項構造に加わると分析する。つまり、この分析では、自動詞構文と他動詞構文における Theme の文法機能の違い（主語か目的語か）は、辞書内の語彙プロセスに基き説明される。

(16) 起動使役交替の語彙プロセスによる分析

a. The ice melted. (melt_{Vi}: (<u>Theme</u>)

b. John melted the ice. (melt_{Vt}: (<u>Agent</u>, Theme))

これに対して、この交替現象に対する統語的アプローチでは、他動詞と自動詞の項構造レベルでの違いは外項 Agent の存在だけであると仮定する（他動詞には

Agent があり、自動詞には Agent がない)。特に注目すべき点は、ウィリアムズの分析と異なり Theme は項構造レベルでは自動詞の場合も他動詞の場合も同じステイタス、すなわちどちらの場合も内項と仮定する点である。

(17) 起動使役交替の統語プロセスによる分析（Burzio 1981, Baker 1988 等）

a. melt_{Vt}: (Agent, Theme)

b. melt_{Vi}: (Theme)

c. John melted the ice (D-structure, S-structure)

d. __ melted the ice (D-structure)

e. The ice melted t (S-structure)

(17a) で示したように、他動詞の melt は Agent を外項、Theme を内項として取り、統語（D 構造）において外項は主語位置に内項は目的語位置に投射され、結果的に (17c) の語順となる。一方、自動詞の melt の項構造は (17b) で示したように Theme が一つ指定されているだけであるが、ウィリアムズとは異なり内項のステイタスをもつと仮定されているため、D 構造では (17d) が示すように目的語位置に投射される。その後の派生において、目的語位置に投射された Theme は、(17e) が示す通り統語的理由で主語位置に移動し、主語の文法機能を担うことになる。この分析では、二つの構文間の Theme の文法機能の違いは、語彙プロセスではなく統語的に説明されることになる。

中間態構文の派生についても、Theme 要素の主語から目的語への文法機能の変化は、語彙構造のレベルの問題でなく統語プロセスが関わっているという分析が提案されている。[*11] この統語アプローチでは、中間態構文の表層主語である Theme 要素は、基底では他動詞構文と同じく動詞の補部位置に投射され、統語レベルの操作で主語位置に移動すると分析されている。

(18) 中間態構文の統語プロセスによる分析

a. __ translate this book easily (D-structure)

b. This book translates t easily (S-structure)

起動使役交替現象の統語的アプローチは、実は「非対格の仮説」という自動詞の類型についての一般化の一部である。非対格の仮説とは、自動詞は伝統的に考えられていたように統語上均質ではなく、動詞と項との潜在的文法関係から大きく

[*11] Yamada (1989), Pesetsky (1990), Hoekstra and Roberts (1993), Fujita (1994) 等を参照のこと。

二つに下位分類されるという考えである。具体的にいうと、動詞のとる項がもっぱら主語として機能するタイプ（非能格動詞: unergative verbs) と、項が主語と目的語の特性を合わせ持つタイプ（非対格動詞: unaccusatie verbs）である。それぞれのタイプの自動詞の代表例は (19) に示す通りである。

(19) 二つの自動詞タイプ

a. 非能格動詞（Unergative verbs）: run, walk, laugh, ring, stink, etc.

b. 非対格動詞（Unaccusative verbs）: appear, exist, freeze, melt, arrive, etc.

非対格の仮説では、この二タイプの自動詞は統語上その基底構造が異なると考えられている。具体的にいうと、(20) で示すように、非能格動詞の場合その項は基底で主語位置にあるが、同じ自動詞であっても非対格動詞の場合はその項は基底では目的語位置にあり、移動操作で表層主語位置に現れると仮定されている。

(20) 非能格動詞と非対格動詞の基底構造

a. 非能格動詞: NP $[_{VP}$ V]

b. 非対格動詞: __ $[_{VP}$ V NP]

非対格性の仮説を支持する経験的証拠は様々な言語で提出され、これら一連の現象は非対格性の基準（unaccusative diagnostics）と呼ばれている。その中でも、結果の述語構文における二つのタイプの自動詞の振る舞いは、この仮説を支持する強い証拠とみなされている。

次節では、自動詞構文における結果の述語の生起可能性について、語彙的アプローチと統語的アプローチが経験的に異なる予測を行なうケースを提示し、その違いに基づいて起動使役交替現象の統語アプローチの優位性を論じたい。

3.1 結果の述語を用いての基底構造テスト

英語を初め多くの言語において、形容詞句あるいは前置詞句が「結果の述語 (resultative predicates)」として解釈される場合がある。(21) と (22) の英語と日本語の例を見てみよう。

(21) a. John painted the wall <u>red</u>.

b. I broke the window <u>into pieces</u>.

(22) a. 太郎は壁を <u>赤く</u> 塗った。

b. 私は窓を 粉々に 割った。

下線部の述語が結果の述語の例である。結果の述語の分類上の基準は意味的なものである。(21) 及び (22) の各々の例で、下線部の述語は、動詞が示す行為により影響を受けた対象の結果の状態を示している。例えば、(21a) では述語（red）は「塗る」という行為により影響を受ける対象（the wall）の結果の状態を示している。このように、意味上、文中の要素の結果の状態を示す述語を総称して結果の述語と呼ぶ。結果の述語は意味上の主語の選択について非常に興味深い特性をもつことが、Simpson (1983) や Rothstein (1983) で指摘されている。(23) の例を考えてみよう。

(23) a. John painted the wall$_i$ red$_i$.
b. *John$_i$ painted the wall exhausted$_i$.
c. 太郎は 壁を$_i$赤く$_i$ 塗った。
d. *太郎$_i$ は壁を くたくたに$_i$ 塗った。

(23) の対比から、結果の述語は日本語の場合も英語の場合も、その叙述対象が目的語でなくてはならないという目的語指向性があることが分かる。次に (24) を見てみよう。

(24) a. The wall$_i$ was painted red$_i$.
b. Which wall$_i$ did John paint red$_i$?
c. 壁は$_i$赤く$_i$ 塗られた。
d. どの壁を$_i$ ジョンは 赤く$_i$ 塗ったの。

(24) では、結果の述語の意味上の主語が目的語位置にないにも拘わらず適格である。しかし、不適格な (23) の例と異なり、(24) では結果の述語の叙述の対象である the wall あるいは which wall は動詞 paint の意味上の目的語であることに注意されたい。(24) の現象が 示しているのは、結果の述語の叙述条件で重要なのは叙述の対象の表層位置ではなく、その基底の統語位置なのだということである。(24) の現象を考慮に入れると、結果の述語の目的語指向性は (25) として述べることができる。

(25) 結果の述語は基底構造で目的語位置にある名詞句と主述関係を持つ必要がある。[*12]

[*12] (25) は Simpson (1983) で述べられている一般化であ る。より正確には、Levin and Rap-

3.2 二つのアプローチの比較

(25) の結果の述語の目的語指向性は、文の基底構造を探る上で非常に有用な手段となる。というのは、文中の名詞句の基底での統語位置、すなわちその名詞句が基底で主語か目的語かを、結果の述語による叙述の可能性に基づいてテストすることができるからである。

ここで、非対格性の仮説を思い出してみよう。非対格性の仮説は、自動詞は統語上均質ではなく、動詞とその項との基底での文法関係に基づき、統語上二つのタイプに分類されるというものであった。それぞれのタイプの自動詞と結果の述語との共起可能性についての事実がこの仮説を強く支持することをみていく。

非対格性の仮説では、(26) のそれぞれの自動詞構文は (27) の異なる構造を持つ。

(26) a. John laughed. (laugh: unergative)
b. The river froze. (freeze: unaccusative)

(27) a. John [$_{VP}$ laughed]
b. The river$_i$ [$_{VP}$ froze t_i]

(25) で述べたように、結果の述語は基底で目的語位置にある名詞句と主述関係になくてはならないという特性をもつ。非対格性の仮説では、非能格動詞の項は基底で主語位置にあり、一方非対格動詞の項は基底では目的語である。それ故、この仮説が正しいとすると、二つの自動詞構文は結果の述語との共起可能性が異なることが予測される。(28a,b,e) と (28c,d,f) を比較してみよう。

(28) a. *John ran exhausted.
b. *John laughed sick.
c. The river froze solid.
d. The vase broke into little pieces.
e. *ジョンはくたくたに走った。

---

paport Hovav (1995) が述べているように、動詞の直接目的語との叙述関係が必要である (Direct Object Restriction)。次の例からわかるように、結果の述語は前置詞の目的語を叙述できない。

*John shot at Mary$_i$ dead$_i$.

f. 川はカチカチに凍った。

非対格性の仮説が予測するとおり、非能格動詞 (laugh, run, 走る) は (27a,b,e) が示すように結果の述語と共起できないが、非対格動詞 (freeze, break, 凍る) の場合、その項は結果の述語による叙述が可能である。これは、非対格動詞の表層主語は、 非能格動詞の主語とは異なり、(29) が示すように基底で目的語位置にあり結果の述語の目的語指向性と矛盾しないためである。

(29) 起動相の自動詞構文の派生（非対格動詞構文の派生）

a. __ froze the river solid (D-structure)

b. The river melted *t* solid (S-structure)

このように、結果の述語との共起可能性に関する事実 (28) は、非対格性の仮説を支持する証拠となる。つまり、melt, freeze, grow, break などの起動使役交替を示す動詞群の自動詞は非対格動詞であり、その表面上の主語は基底では目的語位置に投射され（つまり項構造では内項)、表層主語位置へは統語レベルで移動する。これはウィリアムズの起動・使役交替の語彙的アプローチの前提、つまりこれらの自動詞の主語は項構造では「外項」、基底構造で主語位置に投射されるという考えの強力な経験的反証となる。

次に、中間態構文の派生に関する語彙的アプローチと統語的アプローチについても、同じように結果の述語を利用した経験的テストに基づき比較可能であることを示したいと思う。

中間態構文では、意味上目的語位置にくるべき要素が主語位置に現れるが、受動態とは異なり動詞に形態上の変化がないのが特徴である。中間態構文の研究は、特に主語位置の名詞句の派生をどう考えるかにより大きく二つのアプローチがあることを見てきた。つまり、「Theme の外項化」のプロセスにより、項構造レベルで実質上主語の文法機能を指定する語彙的アプローチ（Williams 1981, Roberts 1986, Fagan 1988, etc）と表層主語は基底構造では動詞補部位置にあり統語で主語位置に移動するという統語的アプローチである。非対格動詞の基底構造を明らかにするのに結果の述語の生起可能性をテストに用いたが、中間態構文の場合にも同様のテストが可能である。

(30) a. The bread cuts into pieces easily.

b. John scrubs clean easily if you can hold him down long enough.

(Tenny 1987:220)

c. Plastic tires wear flat easily. (Pesetsky 1990:64)

d. This envelop steams open easily. (Pesetsky 1990:64)

e. このブロックは簡単に二つに割れる。

f. このシャツは洗濯機できれいに洗える。

(30) のように、中間態構文に結果の述語が現れるという事実は、D 構造の段階では (31) のように動詞の意味上の目的語が補部位置にあることを示している。統語プロセスでこの位置から主語位置に移動し表面上 (30) の音声形となる。

(31) 中間態構文の派生

a. __ wear plastic tires flat easily (D-structure)

b. Plastic tires$_i$ wear t flat$_i$ easily (S-structure)

語彙的アプローチでは中間態動詞は Theme の外項化という項構造レベルの操作で形成されると仮定するため、Theme は D 構造のレベルで主語位置に投射される。そのため、この分析は目的語指向の特性を持つ結果の述語の生起は不可能と予測するが、予測に反し事実は (30) が示すように中間態構文における結果の述語の生起は全く問題はない。(30) の経験的事実は、それ故、中間態動詞が Theme の外項化という項構造レベルの操作で形成されるという分析の反証となる。

以上、起動使役交替と中間態構文を例に交替現象が辞書内の外項ステイタスを変える語彙プロセスに起因するという分析と、これらの交替は基本的には統語現象であるという統語的アプローチを比較して議論してきた。 このような交替現象の裏にある「語」レベルの問題を、辞書と統語のどちらで扱うべきかは、アプリオリに決まる問題ではない。経験的議論の積み重ねでどちらのアプローチが正しいかを判断する必要がある。今議論した、結果の述語の特性を利用したテストの結果を見る限りにおいては、統語アプローチが経験的には支持されると考えられる。

上の議論が基本的に正しいとすると、辞書には、すくなくともウィリアムズが主張した外項のステイタスを直接変更するタイプのプロセスは存在しないと予測される。この予測は様々の経験的事実に照らして検証する必要があるが、リンキングについての一般的仮説である意味役割付与の統一性の仮説 (UTAH、(32) として再掲) との整合性を考えると、概念的レベルでは極めて自然な仮定とみなしてもよさそうである。

(32) The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH)
Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of

D-structure. (Baker 1988:46)

4 語彙的アプローチの新展開

4.1 語彙概念構造と語彙従属

交替現象や述語の項構造についての研究は、1980年代後半から、辞書における各述語の記述を豊かにすることで、語形成や他動性交替に関わる現象を説明しようとする試みが盛んなった。初期の研究としては、Hale and Keyser（1987）やLevin and Rapoport（1988）が代表的なものである。[*13] このアプローチでは、辞書は語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure、以下LCS）と述語項構造（Predicate Argument Structure、以下PAS）という二つの異なるレベルの表示を含むと仮定されている。LCSは述語分解で形成される抽象的意味元素と変項から構成される意味表示で、各語彙の「辞書的意味」を記述する。LCS表示の変項はリンキング規則でPAS表示に関連づけられる。PAS表示では外項・内項などの構造上の区別が指定され、この情報をもとにそれぞれの項は適切な統語位置に投射される。例えば、動詞putは(33)のLCS、PAS表示をもつ。

(33) put の LCS と PAS

a. LCS: [x cause [y to be at z]]

b. PAS: x < $\underline{y}$, P_{loc} >

LCSの表記を用いることで、単純な統語的アプローチでは捉えられなかった、他動詞のbreakは自動詞のbreakを「使役化」したものであるという意味的直感を自然な形で記述することができる。例えば、動詞breakの起動・使役の他動性のコントラストは次のように記述される。

(34) break（起動、使役）の LCS (Rappaport *et. al* 1993:44)

a. Non-causative BREAK: [y become BROKEN]

b. Causative BREAK: [x cause [y become BROKEN]]

また、項のステイタスはPASという別レベルで指定できるため、(35)のようにPASを指定することで自動詞breakの非対格性を保証できる。[*14]

[*13] Jackendoff(1983, 1990) も基本的にはこの路線である。

[*14] < > 標記では、その内部にある要素が内項、外部にあるものが外項を意味する。

(35) break（起動、使役）の PAS

a. Non-causative BREAK: < y >

b. Causative BREAK: x < y >

Hale and Keyser (1987) は中間態構文に現れうる動詞の可能な意味タイプについて、LSC に決定的に依拠して説明する試みを提示している。

(36) 中間態が可能な動詞

a. This bread *cuts* easily.

b. This wood *splits* easily.

c. Tender meat *fries* easily.

(37) 中間態が不可能な動詞

a. *This wall *hits* easily.

b. *Small houses *paint* easily.

c. *Whales *save* easily. (Levin and Rapoport 1988: 284)

(36) と (37) のコントラストは、それぞれのグループの動詞の LCS の違い、例えば (38) と (39) の違いに起因すると考え、中間態構文は (40) に示されたタイプの LCS を持つ動詞からのみ可能であるという条件を提案している。

(38) cut の LCS

[x CAUSE [y develop linear separation in material integrity ...]]

(39) hit の LCS

[x come forcefully into contact with y]

(40) [x CAUSE [y undergo change]], where y is 'theta-committed' (projected)

(40) の大事なポイントは、中間態構文に現れうる動詞はその LCS に CAUSE という意味元素を含む必要があるというものである。

(40) を念頭におき、(41a-c) と (42a-c) のコントラストを考えてみよう。

(41) a. *This kind of meat pounds easily.

b. *These dishes wipe easily.

c. *The door kicks easily.

(42) a. This kind of meat pounds *thin* easily.
b. These dishes wipe *dry* easily.
c. The door kicks *down* easily. (Levin and Rapoport 1988: 285)

(41) の動詞は単独では中間態構文に現れることのできないが、(42) のように結果の述語を伴うことでそれが可能となる。Levin and Rapoport (1988) は、これらの動詞が結果の述語を伴う場合、その LCS が語彙従属という語彙プロセスで (40) と矛盾のない形に変えられるからだと主張する。語彙従属というのは、述語の基本的意味構造を他の意味元素の下に埋め込んで複合的 LCS を形成する規則である。上の例に則して具体的に述べると、他動詞 wipe が結果の述語を取る場合、基本の LCS(43a) が CAUSE 述語の下に埋め込まれ複合的 LCS(43b) と変化する。これは、結果の述語の付加による「使役化」を LCS の複合化のプロセスとして捉えようとした ものである。

(43) 語彙従属 1
a. wipe1: [x 'wipe' y]
b. wipe2: [x CAUSE [y BECOME (AT) z] BY [x 'wipe' y]]

wipe は語彙従属を受けることでその LCS が (43b) という (40) と整合性がある形となり、その結果中間態構文が可能となるというのが彼女たちの考えである。

語彙従属が関わるもう一つの事例として、run タイプの動作の様態動詞に見られる非対格性の交替現象がある。[*15]run タイプ動詞は、いくつかの非対格性の基準に照らし非能格動詞と分類されている。例えば、(44) が示すとおり非対格動詞には不可能とされる-*er* 名詞化（-*er* Nominalization）が可能であり、逆に非対格動詞に典型的にみられる場所格倒置 （Locative Inversion）の構文をとることができない。[*16]

(44) -*er* 名詞化

[*15] Levin (1993) や Levin and Rappaport Hovav (1992, 1995) は、動作の様態動詞は微妙に特徴が異なる run タイプと roll タイプの二つに大別されると述べている。非対格性の交替現象は run タイプの動作の様態動詞に典型的に見られる。

[*16] 他にも、(i) のように同族目的語をとることができる、あるいは (ii) のように prenominal past participle として用いられないことなども、このタイプの動詞が非能格動詞であることを示す証拠として用いられる。
i. John walked a long walk. (Fukuda 1990)
ii. * a recently walked boy

a. runner/walker/jumper/etc.
b. *appearer/*exister/*dier/etc. [*17]

(45) 場所格倒置
a. *In the room ran a shrieking child. (Levin and Rappaport Hovav 1992: 259)
b. *On the table jumped a cat. (Levin 1993:93)

しかし、run タイプの動作の様態動詞が方向を示す表現をとる場合、非対格性が変化する交替現象が存在することが Van Valin (1987)、Fukuda (1990)、Levin (1993)、Levin and Rappaport Hovav (1992, 1995) で議論されている。方向の前置詞句をとった場合、このタイプの動詞は非対格動詞に特有の統語環境で現れる。(46) の場所格倒置のコントラストがこのことを示している。

(46) a. *In the room ran a shrieking child.
b. Into the room ran a shrieking child.

Levin and Rappaport Hovav (1992) は、この交替現象は run タイプの動作の様態動詞に次の語彙従属のプロセスが適用した結果であると説明している。

(47) 語彙従属 2 (Levin and Rappaport Hovav 1992:260)
a. [x MOVE in-a-running-manner] (run: manner of motion) $\Longrightarrow$
b. [x GO TO y BY [x MOVE in-a-running-manner]] (run: directional)

(47) の語彙従属のプロセスで非能格用法の run の LCS(47a) は、上位の述語の下に埋めこめられ (47b) の LCS となる。さらに、PAS のレベルで (47b) の変項 x が内項にリンクすると仮定することで、動作の様態動詞が方向の表現をとる場合の非対格性の変化を記述することができる。

4.2 語彙的アプローチの概念上の問題とその解決

前節では、LCS と PAS という二つの表示を含む豊かな辞書を仮定することで、単純な統語アプローチでは捉えられなかった起動使役交替や中間態構文の語彙意

17 非対格動詞でも使役交替で他動詞化が可能なものは、-er* 名詞化が可能である。例えば、opener, drier, freezer 等がその例である。

味論的特性の説明が可能となることを見てきた。LCS と PAS を仮定した語彙的アプローチでは、様々な語彙意味論的現象が発掘され説明が試みられてきている。記述的レベルでは非常に充実した研究成果が生まれていると思われる。しかし、辞書の計算部門の記述能力を豊かにするこのアプローチは、概念的レベル、とりわけ説明的妥当性の観点から見た場合、潜在的に大きな問題を抱えている。

新たな語彙論的アプローチが仮定する理論的道具立てを考えてみよう。LCS 表示は、変項と定項に加え「述語」として機能するいくつかの意味元素を含む。また、この表示は、述語同士の関係により階層化された、統語構造と類似した内部構造をもつと仮定されている。さらに、ある LCS を別の LCS へ何らかの条件のもとで写像する、語彙従属のようなプロセスも仮定されている。このように、新たな語彙論的アプローチは、辞書内に LSC という潜在的に非常に高い記述能力をもつ表示と、それを変更する強力な装置を仮定している。しかし、LCS 表示を構成する要素や表示の写像に用いられる装置群について、現在のところ十分に制限的な理論体系が提示されてはいないと思われる。

この状況は、標準理論から 1970 年代前半までの生成文法統語論における変形規則の乱用にもに見られた。この時期は様々な統語現象の発掘が盛んに行なわれた時期であるが、現象の説明に記述能力の高い変形規則が利用された。当時の変形規則の記述には、規則適用の構造条件が文脈指定の形で細かに述べられたり、規則適用の条件が規則の付帯条項として組み込まれていたりと、多くの情報が規則の記述の中に盛り込まれた。これは複雑な現象の記述には役立ったが、一方でこのアプローチは大きな概念上の問題、つまり母語獲得のプラトンの問題とのジレンマに直面した。つまり、変形規則の記述能力を高くすることで現象の記述という点では優れたシステムとなるかもしれないが、それと同時に答えなくてはならない母語獲得の問題、すなわち「子供は乏しい資料からどのように複雑な規則を学ぶことができるのか」に答えを出すことが難しくなる。このジレンマを脱するため、チョムスキーは変形規則を始めとする文法の装置の記述能力を厳しく制限する方向へ動いた。これが1980年初頭の「規則の体系」から「原理とパラメーターの体系」へという文法というシステムに対する考え方の根本的変化、後にチョムスキーが“the second conceptual shift”と呼ぶ文法システムの概念上の変更へとつながる。

辞書が LCS と PAS をその表示として持つ統語とは質の異なる計算システムを含むと仮定した場合、この辞書内の計算部門においても統語部門と同様に十分に制限された理論が必要となる。

この状況に直面してとる道は二つある。一つは、辞書内に統語とは異なる計算システムを仮定し、その記述能力を十分制限しながら、その制限された装置群を使い、これまで発掘した様々な語彙意味論的現象を見直していく道である。もう一つは、計算的辞書の概念を破棄する道である。LCS や PAS という辞書レベルの表示と考えられていたもの、語彙従属のような語彙プロセスと考えられていたものは、実は統語表示・統語プロセスであると捉えなおす可能性である。どちらが正しいかは、この二つのアプローチの経験的事実に基づいた議論を比較する中で明らかになっていくであろう。

次節では、後者の統語的アプローチに立脚し、これまで見てきた語彙意味論的現象が統語レベルの問題であるという議論を行なう。このアプローチは、Baker (1988) の編入（incorporation）研究の成功がきっかけになり、Pesetsky (1990, 1995) や Hale and Keyser (1993)、さらに分散形態論 (Distributed Morphology) を仮定した Marantz (1997) などで、理論面でも経験的にも大きな研究の進展が見られた。以下では、これらの研究の関連部分をごく簡単に紹介しながら、交替現象の新たな統語分析の可能性を議論していく。

5　交替現象への新たな統語的アプローチ

5.1　複雑述語形成に対する編入アプローチ

Baker(1988) は、ある種の複雑述語 (complex predicates) の形成に編入 (incorporation) という統語レベルでの主要部（X^0）移動のプロセスが関わっていることを、抱合語（polysynthetic language）を中心とする豊富な経験的研究に基づき議論している。複雑述語が形成されると、それに伴い動詞の項の文法機能が変化する現象が見られることがあるが、この文法機能の変化は編入プロセスにより述語と項の構造関係が変化した結果（a side effect of this word movement, Baker 1998:1）と分析する。Chichewa の使役化の例を見てみよう。

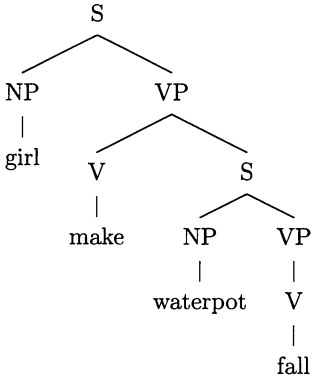
(48)　Chichewa の使役化 (Baker 1988:10-11, 21)

a. Mtsikana a-na-chit-**its**-a kuti mtsuko *u*-**gw**-e
girl do-**cause** that waterpot **fall**

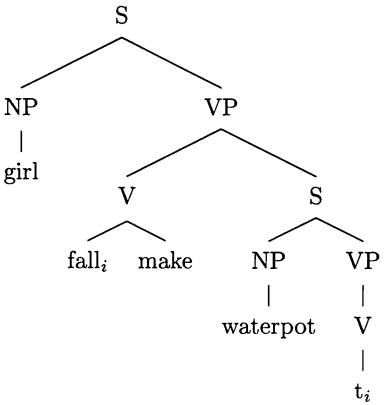
b. Mtsikana *a*-na-**gw-ets**-a mtsuko
girl **fall-cause** waterpot

(48a,b) は主題的意味は等価であり (thematic paraphrase)、使用されている形態素も基本的には同じである。(48a) と (48b) の決定的違いは、(48a) では異なる節にある-gw-(fall) と-its(cause) が (48b) では同一節で形態的複合体を形成していることである。これにともない mtsuko(waterpot) の文法機能が主語から目的語へと変化している (動詞の一致が主語の u-から目的語の a-に変化)。ベイカーは、これを統語派生のある段階で (49) で示される動詞編入 (verb incorporation) が適用され、それに伴う動詞と項の間の構造関係の変化から waterpot の文法機能が変更となると分析している。

(49) a.



b.

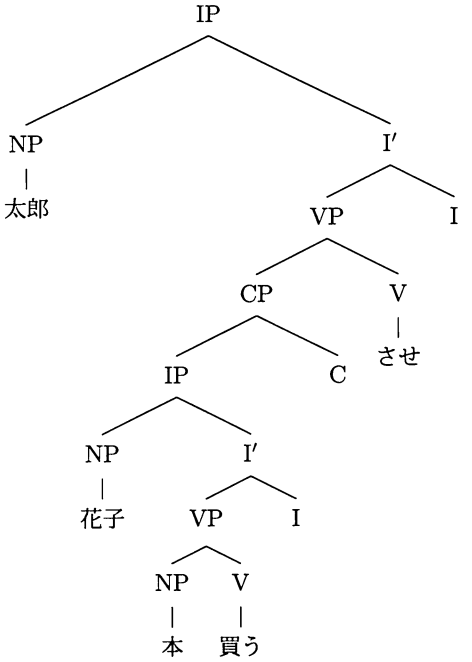


ベイカーの編入のアイディアは、日本語のような膠着語 (agglutinative language) の複雑述語の形成にも応用されている。例えば、Terada (1990) では日本語の使役構文 (*o*-causative) (50) は、辞書レベルで何らかの語彙プロセスによっ

て形成されるのではなく、統語部門において (51) に示すように動詞編入により派生すると議論している。[*18]

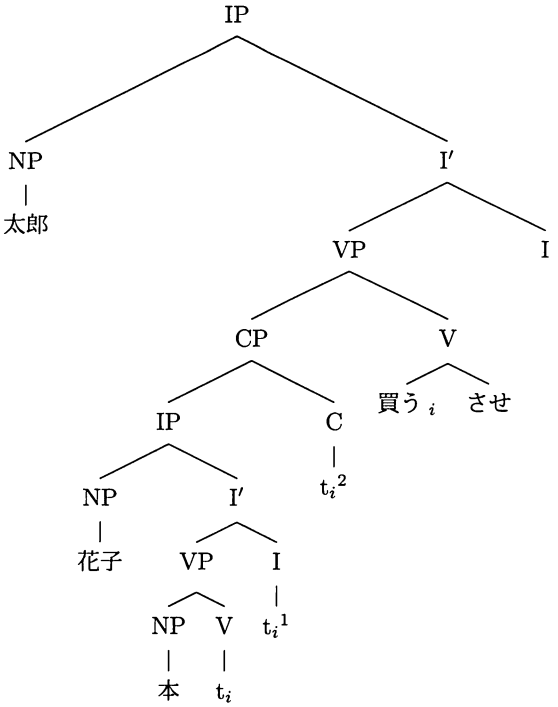
(50)　太郎は花子にその本を買わせた。

(51)　a.



[*18] 語彙プロセスによる分析については、Farmer (1980), Miyagawa (1989), Williamas (1981) 等を参照。

b.



複雑述語形成の編入分析は、多くの研究によってその妥当性が経験的に裏付けられるとともに、その適応領域が広がっていった。その一つが、英語の交替現象を述語主要部とゼロ形態素との統語レベルの結合と見なすアプローチである。次節では、交替現象の編入分析の試みを紹介し、その経験的妥当性について議論する。

5.2　英語の交替現象の編入分析

この節では、英語の交替現象には、日本語の複雑述語の形成と同様に、編入という統語プロセスが決定的に関わっていることを主張したい。

抱合語や膠着語のように形態的に豊かな言語の場合、編入は音形を持つ要素間の結合のため、形態上あるいは音形上の変化として具現する。英語の交替現象の場合、動詞にはこのような形態上の変化は見られないが、実は音形を持つ形態素と音形を持たないゼロ形態素との結合という統語プロセスが関わっていると考

える。

英語の交替現象に、編入のような何らかの統語プロセスが関与しているという議論は、Hale and Keyser (1993)、Pesetsky (1990, 1995)、Marantz (1997) などで展開されてきた。以下では、起動使役交替と中間態構文を交替現象の代表的事例として取り上げ、それらが統語的現象であること論ずるが、ここで以下の議論にとって重要な概念である「ゼロ形態素」について次の二つのことを仮定しておく。

(52) ゼロ形態素についての仮定

a. 英語の辞書は時制などの機能範疇、範疇中立的な動詞ルートのほかに、項構造をもつゼロ形態素（例えば使役の CAUS）を含む。

b. 項構造をもつゼロ要素は統語において必ず動詞ルートと結びつく必要がある。

5.2.1 起動使役交替

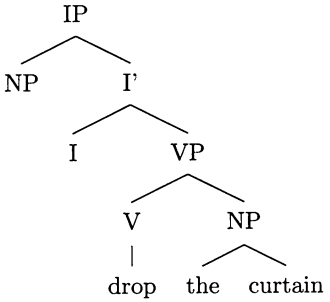
まず、(53) の起動使役交替を見てみよう。

(53) a. The curtain dropped.

b. The mechanism dropped the curtain. (Pesetsky 1995:79)

自動詞の drop は内項を一つとる非対格動詞であり、統語において (54) の構造へと投射される。

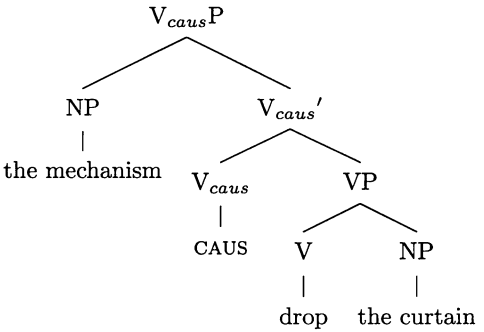
(54)



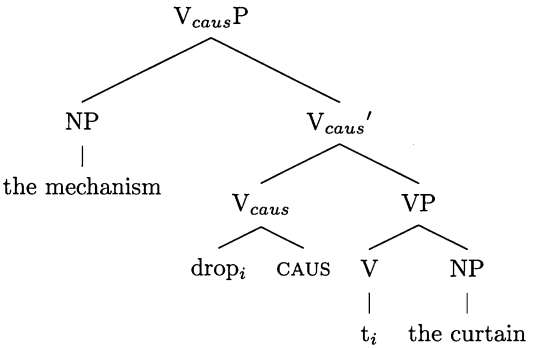
一方、(53b) の使役の意味をもつ他動詞の drop は、表面上は自動詞の drop と違いはないものの、内部構造上は動詞ルートと使役のゼロ形態素の複合体であると仮定する。語形成の観点から具体的に言い換えると、英語の辞書は日本語の

"-sase" に相当するゼロ形態素 CAUS を含み、起動使役交替を示す動詞の他動詞形は、動詞ルートと CAUS が統語において結合して形成される複雑述語と考えるのである。このように仮定した場合、起動使役交替の他動詞構文は、(55) の統語表示をもつことになる。

(55) a.



b.



(55a) は、(54) の自動詞構文の動詞句がゼロ形態素 CAUS の補部位置に埋め込まれた構造となっている。その後の派生において、動詞ルートが主要部移動によりゼロ形態素に付加して複合体を形成する。この起動使役交替分析の直感的考えは、起動相の自動詞が使役交替をする場合は、その動詞は CAUS というゼロ要素が主要部となる構造に埋め込まれることで使役の意味を持つとともに他動詞化し、語彙的使役構文にあらわれるというものである。それゆえ直感的レベルでは、この分析は (34) の LCS レベルでの交替現象の説明を、統語レベルで焼き直しただけのものに見えるかもしれない。このように同じ直感的アイディアを実現する二つの異なる分析法がある場合、概念的レベルの議論は別にして、これらのアプローチが経験的に異なる予測をするパラダイムを探すことが必要となる。ペセツ

キーの提示している、(56) と (57) の起動使役交替の二つの構文の名詞化の可能性についての事実は、これら二つのアプローチを経験的に比較する手がかりとなる。[*19] 次の例における、自動詞構文と他動詞構文を名詞化した場合の、容認可能性の差に注目してみよう。

(56) a. The curtain dropped.
b. The mechanism dropped the curtain.
c. the drop of the curtain
d. *the mechanism's drop of the curtain (Pesetsky 1995:80)

(57) a. Tomatoes grow.
b. the growth of tomatoes
c. Bill grows tomatoes.
d. *Bill's growth of tomatoes (Chomsky 1970: 25)

(56-57) のパラダイムは、起動使役交替の自動詞構文は名詞化可能だが、他動詞構文はそれが不可能であるということを示している。この現象に対しては、これまでいくつかの統語的説明が提案されているが、ここでは Pesetsky(1995:73-75) で論じられているマイヤーズの一般化（Myers's generalization）を使った分析を見ていく。

(58) マイヤーズの一般化
ゼロ派生語に派生形態素を接辞として付けることはできない。(Pesetsky 1995: 75)

マイヤーズの一般化は、「動詞の [$_V$ support] に基づく supportive は可能だが、名詞から派生する*supportial や *supportious は不可能である」という観察に基づく。Myers (1984) は、この事実は名詞の support が動詞の support からのゼロ派生形 ([$_N$ [$_V$ support]ϕ]) であると仮定し、ゼロ派生形には更なる接辞の付加が不可能とすることで説明できると議論している。

マイヤーズの一般化に照らし (56-57) をみていく。自動詞構文の名詞化は動詞語根に直接名詞接辞（*-th*, *-ment*, -ϕ 等）が付与され形成されるが、他動詞構文の名詞化では、ゼロ形態素分析を仮定した場合、名詞接辞が付与される対象は [動詞ルート-ϕ_{caus}]（例えば [grow-ϕ_{caus}]）である。このように、他動詞の grow が

[*19] この議論は、もともとは Chomsky (1970) で行なわれたものである。

内部にゼロ形態素 ϕ_{caus} を含むゼロ派生語と仮定すると、(56-57) で名詞化が不可能なのは (58) の一般化の事例の一つと見なすことができる。マイヤーズの一般化の裏に、どのような文法の原理が関わっているかは定かではないが、この一般化による (56-57) のパラダイムの説明がゼロ派生語を前提とするものである限り、これを現在の LCS レベルで捉え直すことはできないと思われる。その限りにおいて、この名詞化に関する事実は統語的アプローチを経験的に支持すると考えられる。[*20]

5.2.2 中間態構文

起動使役交替とほぼ同じ議論が中間態構文でも可能である。英語には、日本語の中間態 (59) において、音声を伴い現れる中間態の形態素（*-eru*）に相当するゼロ形態素の MDL があり、ゼロ形態素 MDL は統語で動詞ルートと結合すると仮定する。

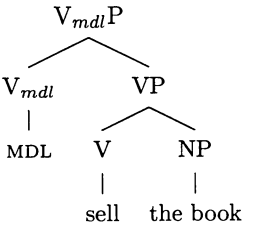
(59) この本はよく売れる。
Kono hon-wa yoku ur-*eru*

(60) 英語の中間態構文のゼロ形態素分析の基本的仮定
a. 英語の辞書は日本語の*-eru* に相当するゼロ形態素 MDL をもつ。
b. ゼロ形態素 MDL は統語で動詞ルートと結合する。

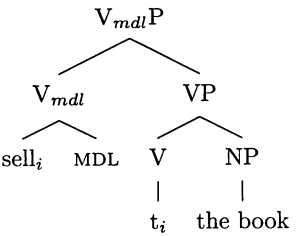
英語の中間態構文では、(61a) が示すように、動詞主要部とその補部からなるユニットが MDL というゼロ形態素の補部位置に埋め込まれ、(61b) が示すように、動詞ルートは主要部移動によりゼロ形態素 MDL と複雑述語の [sell-ϕ_{mdl}] を形成すると仮定する。

[*20] マイヤーズの一般化がどのような文法の原理から帰結するかは現時点では明らかではない。Pesetsky(1990:59) は、この一般化が Baker(1988) 等で述べられている主要部の連続循環的移動を禁じる原則と同じ性質を持つことに着目し、空形態素フィル ター（注 20 参照）を仮定して説明している。また、Pesetsky(1995:83) は、もう一つの可能性として、Fabb(1988) の接辞研究の方向でも説明を試みている。 また、Marantz(1997) では分散形態論を土台に据えた独自の説明がなされている。

(61) a.



b.



(60) を仮定すると、英語の中間態動詞は、(62a) のように、常に [V_{root}-ϕ_{mdl}] というゼロ形態素を含むことになる。ということは、この後に名詞化接辞が付加されると、使役形の場合と同様に、マイヤーズの一般化が対象とする構造 (62b) となる。

(62) 中間態動詞の名詞化

a. This book [translate-ϕ_{mdl}]s easily.

b. [$_N$[[translat]ϕ_{mdl}]ion]

マイヤーズの一般化が正しければ、ゼロ形態素を含む中間態動詞を名詞化するのは不可能と予測されるが、(63) はこの予測が正しいことを示している。

(63) a. *the bureaucrats' easy bribery

b. *the play's easy performance

c. *the book's easy translation (Pesetsky 1990:65)

この節では、使役化あるいは中間態化された動詞が名詞化できないという事実を指摘し、この現象はマイヤーズの一般化の一例とすべきパラダイムであることを議論した。このパラダイムについての分析が正しいとすると、その前提となる仮定、つまり英語の動詞交替は動詞ルートとゼロ形態素とが編入により結合することで生じる現象であるという統語アプローチの主張を経験的に支持する証拠となる。

6 おわりに

英語の交替現象は、生成文法の語彙意味論研究が精力的に研究してきた分野の一つである。これまで、この現象を辞書レベルの問題と考えるアプローチと統語の問題として扱うアプローチの二つがあり、それらが経験的な議論を戦わせることで研究が進展してきた。本稿ではこれまでの主だった議論を概観した上で、英語の交替現象は、抱合語や膠着語にみられる複雑述語形成と平行した現象であるという統語的アプローチを支持する主張を行った。日本語の複雑述語形成と英語の交替現象との関係は、次のようにまとめられる。

(64) 日本語の複雑述語形成

- 日本語のような形態的に豊かな言語の場合、使役などの形態素も音形をもつ。
- 複雑述語の形成は、動詞のルート（*e.g.* tabe）と音形をもつ形態素（*e.g.* *-sase*）の間の主要部移動という統語プロスセスにより行なわれる。

(65) 英語の交替現象

- 英語のように形態的変化に乏しい言語の場合、日本語の音形をもつ形態素（例えば使役の*-sase*）に対応するゼロ形態素（例えば CAUS）がある。
- このゼロ要素は統語で音形をもつ動詞ルート（*e.g.* grow）と主要部移動により結合し、音声的には動詞ルートと同一の使役形（grow-ϕ_{caus}）を形成する。
- 交替現象と見えていたものは、実際は動詞ルート（overt element）とゼロ形態素（covert element）との複雑述語の形成である。

「動詞編入」という統語プロセスは、形態論的に豊かな言語では、複雑述語形成の現象として具現し、英語のような形態変化に乏しい言語では動詞の交替現象として生じる。逆に言うと、複雑述語形成と交替現象は、動詞編入と言う同一の統語プロセスが具体化する二つのケースなのである。

＊本論文は、2001 年 10 月 7 日に北海学園大学で開催された、日本英文学会北海道支部第 46 回大会語学部門シンポジウムにおける発表原稿に加筆修正を施したものである。このシンポジウムで共にパネラーを務めた、北海道大学の大野公裕氏と札幌大学の時崎久夫氏には事前の話し合いで貴重なコメントをいただいた。ここに謝意を述べたい。

References

Baker, M. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing.* University of Chicago Press, Chicago, Ill.

Burzio, L. (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach.* Dordrecht, Ridel.

Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT, Cambridge, Mass.

Chomsky, N. (1970) "Remarks on Nominalization," in Chomsky (1972) *Studies on Semantics in Generative* Grammar. Mouton.

Chomsky, N. (1992) "A Minimalist Program for Linguistic Theory". *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1, MIT, Cambridge, Mass.

Fagan, S. M. B. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-204.

Farmer, A. *On the Interaction of Morphology and Syntax*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Fujita, K. (1994) "Middle, Ergative and Passive in English—A Minimalist Perspective," *MIT Working Papers in Linguistics* 22, 71-90.

Fukuda, K. (1990) "The Unaccusativity of Locomotion Verbs."『北海道英 語英文学』第 35 号、63-72、日本英文学会北海道支部.

Hale, K. and S. J. Keyser (1987) "A View from the Middle," *Lexicon Project Working Papers* 10. 1-64. Center for Cognitive Science, MIT.

Hale, K. and S. J. Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," in *The View from Building 20,* edited by K. Hale and S. J. Keyser, 53-109, MIT Press.

Hoekstra, T. and I. Roberts (1993) "Middle constructions in Dutch and English," in *Knowledge and Language, Volume II: Lexical Conceptual Structure,*

edited by Reuland E. and W. Abraham, 183-220, MIT Press.

Jackendoff, R. S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Jackendoff, R. S. (1983) *Semantics and Cognition*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Jackendoff, R. S. (1990) *Semantics Structures*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Kageyama, T. (1993) *Bunpou to Gokeisei* (Grammar and Word Formation), Hituji Shobou, Tokyo.

Lees, R. B. (1960) *The Grammar of English Nominalizations*. Mouton, The Hague.

Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. University of Chicago Press, Chicago, Ill.

Levin, B. and T. R. Rapoport (1988) "Lexical Subordination." *CLS* 24, 275-89.

Levin, B. and M. Rappaport (1989) "An Approach to Unaccusative Mismatches." *NELS* 19, 314-28.

Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1992) "The Lexical Semantics of Verbs of Motion: The Perspective from Unaccusativity," in *Thematic Structures: Its Role in Grammar* edited by I. M. Roca (1992), 247-69, Mouton de Gruyter.

Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Marantz, A. P (1997) "Not Escape from Syntax: Don't try Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon," ms. MIT.

Miyagawa, S. (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*. (Syntax and Semantics 22) Academic Press, New York.

Myers, S. (1984) "Zero-derivation and Inflection," *MIT Working Papers in Linguistics* 7, 53-69.

Pesetsky, D. (1990) "Experiencer Predicates and Universal Alignment Principles," ms. MIT.

Pesetsky, D. (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Rappaport, M., Levin, B. and M. Loughen (1993) "Levels of Lexical Representation," in *Semantics and the Lexicon*, edited by J. Pustejovsky, 37-54, Kluwer, Dordrecht.

Rapoport, T. R. (1990) "Secondary Predication and the Lexical Representation of Verbs," *Machine Translation* 5, 31-55.

Roberts, I. (1986) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Foris Publication.

Rothstein, S. (1983) The *Syntactic Form of Predication*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Simpson, J. H. (1983) "Resultatives," in *Papers in Lexical-Functional Grammar*, edited by B. Levin, M. Rappaport and A. Zeanen, 143-57. Indiana University Linguistics Culb.

Tenny, C. (1987) *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Terada, M. (1990) *Incorporation and Argument Structure in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst, Mass.

Van Valin, R. D. Jr. (1987) "The Unaccusative Hypothesis vs. Lexical Semantics: Syntax vs. Semantic Approaches to Verb Classification." *NELS* 17, 641-661.

Williams, E. (1981) "Argument Structure and Morphology," *Linguistic Review* 1, 81-114.

Yamada, Y. (1989) "Passive Nominals and the Affectedness Condition," Talk given at the 30th meeting of *Sapporo Linguistic Circle*.